第2回深坂さくらえ
―四月五日―

「さくら友の会」のさくら祭り「深坂さくらえ」が四月五日（日）開催された。前日の雨も上がり、絶好の花見日和となった。九十名が参加した。花も見頃で、ウォーキングは健脚コース（見晴台）、健康コース（植物探査）共に快適なものとなった。

深坂の森には、池や小川がある点が、桜の風景に一層の変化を与えている。静かな湖面に映える桜、川面に花びらを散らせながら、惜しげもなく、或いは速く、或いは緩く石の間を流れる渓流などが楽しめる。

湖面を背景に、風音と共に或いは横に、或いは下に、或いは上に向かって舞う桜吹雪には、時の経つのも忘れて眺め入る。

ゲームで楽しむ

家族や一般の子ども達を交え、ジャンケン大会、ビンゴゲームなどで大いに盛り上がり、歓声が森に木霊した。

ウォーキング

互いの桜の育ち具合を見たり、色々花を見つけては詳しい人から、名前を教えてもらったりしながら、約二ｋｍの健康コースは、老人にも楽しいコースだ。

一緒に参加した子ども達が、「これは何？」を連発して、お母さんや、おばあさんもたじたじとなる光景も見られた。

林の中では、小さい青色の花、フデリンドウを発見。

吟行

ウォーキングの間に、各自俳句を作って投句することになっている。三二人七四句の応募の内、入選作のみ掲載する。

特選　小山順一
せせらぎのはだしの子等に花が舞う

入選　和泉昭夫
さくらえの賑わい聴こゆ見晴台

入選　山田澄枝
懐かしききみの名を読み桜道

入選　岡田久子
孫が飛び桜まい散る深坂かな

佳作　小山順一
めだか追う子等の背中に桜散る

佳作　西川浩子
咲けば散る想いとともにさくらかな

佳作　道坂　優
ゆるやかに川面彩る花いかだ

佳作　常岡和代
すきざきより眼下を見ればのどかなり

佳作　玉川美代子
十年振りの友と出会いて花巡り

佳作　松崎和江
夢希望桜に願う子の未来

フデリンドウ

研修旅行
吉野山を訪ねて
―四月十日出発、十二日帰着―

さくら友の会では今年から研修旅行に行くことにした。最初に行くに相応しい所として選ばれたのは吉野山である。三九名が参加した。素晴らしい旅を紀行文で紹介する。

一目千本の桜（吉水神社から）

吉野山を行く

津田和子

山桜が咲き始めた四月十日から十二日、吉野山桜めぐりの旅に参加する。はじめて故郷の山に似た深坂の山に桜を植えて花が咲いたらいいなと思っていたら、こうも長くつき合うと、やっぱり桜にたましいを吸い取られた思いがする。船の旅はゆっくりしていい。十一日の朝、バスで憧れの吉野山に向かう。まだ見ぬ山に心がおどる。

「うわあ！すごいねえ！」山また山に咲く山桜、風が吹くと谷から吹き舞う花吹雪が、車窓にふりそそぐ様は見事だ。こんな桜吹雪は見たことがない。

いよいよ吉野山に到着。「おおっ！」急な坂道をのぼる人、下る人。人、人の波に押され、両側に並ぶ店に、身動きできないほどの人の数。どこからこんなに集まって来るかと不思議だ。予想外の光景に驚かされる。それ以上に桜々に感動する。見上げても、振り返っても桜、ピンク一色の山だ。それにしても何と急な坂だ。手に持つペットボトルのお茶に助けられ、フウフウ、ハアハアいいながらも、上へ上へとのぼる。

山々の斜面も平地も、桜の花で満開だ。はるかいにしえの戦さ日の中、義経、

静御前、佐藤忠信らは、この山道をどんな思いで歩いただろうか。秀吉はこの山に桜を植え、花見をすすめたと聞くが、その生活はどうであったろうか。まるでタイムスリップしたように、歴史の中にとっぷりはまり、過ぎし日を思う。西行法師は歌を詠み、桜をめでた。

わたしも疲れた足を止めては句作にふける。

年忘れ桜の山に
　かくれんぼ
寺の鐘桜の中から
　澄み渡る

この山で一番楽しみにしていた「文学館」に立ち寄る。歩いても二時間半過ぎた。中に入ると「まあ！」。思っていた通り、大正時代の雰囲気で、ガラスケースの中に夢路の表紙絵がずらりと並んでいた。「なつかしいちゃ」。伊東深水の掛軸もあった。

中学時代にかえった気分で、文学に酔いしれる。また歩くと山頂近くに、民家の集落があった。生活のにおいのする洗濯物が、桜の下でゆれていた。老女に会い、改めて生活のきびしさを知る。ここと違う深坂の桜には、まだ縁があり、桜の育つ環境も異なるが、とても勉強になった。

企画された世話人の方々に感謝。桜に心いやされ、元気をもらった春のひとときに、楽しい旅であった。

金峯山寺蔵王堂

吉野千本桜　研修旅行

山田　澄枝

四月十一日（晴）大阪南港から、バスは思ったよりスムーズに、念願の桜の名所吉野山に登っていった。

はやる気持ちを押え、「さくら友の会」の帽子を深めに被り、ガイドさんを先頭に歩き始めると、満開の桜と桜吹雪が見事に私達を、歓迎してくれた。

早々に食事を済ませ、格式高い黒門・銅の鳥居・土産物店の突き当たりの国宝仁王門・吉野のシンボル国宝金峯山寺蔵王堂と歩き、進んで行くとだんだん観光客が混雑してきた。赤い帽子を見失わないように気を配り、土産物店を見ながら吉水神社に着いた。

桃山建築が美しく雰囲気の在る神社だった。秀吉が五千人の家来を引き連れて盛大な花見の宴を催した地、一方、義経と静の美しい悲恋物語の舞台、奥深い吉野山には、悲しい歴史の方が、似合っていると思った。

見渡しよき境内から望む、一目千本の景色は、中千本、上千本の谷から尾根へと春色に染まった山桜が連なる大迫力に感動し、これぞ吉野桜と大満足した。想像以上に美しく壮観で嬉しかった。元気を貰って如意輪寺に向かった。

ハイキングコースを下ると、人波も多少少なくなり、谷間で満開の桜も、まだ散らずに咲き誇っていたが、木は余り大きくなかった。最期の階段は、少し息切れしたが、如意輪寺からの景色を望みたく頑張れた。来た道を見下ろすと、まだ多くの人がこちらを目指して登っている姿が見渡せた。

境内の斜面には、二千七年全国から寄贈された枝垂れ桜が、所狭しと植樹され花を付けていた。前方の山頂に屋根が見える吉水神社はまるで桜の雲海の上に、そびえているように見えた。

復路は集合時間が気に掛かり、足早に下って登ると、観光客が又一段と増えた感じで、道路は人で溢れていたが、ガイドさんが帽子を見つけ小旗を振って声を掛けてくれホッとした。

見なかった上千本、奥千本の桜は、どのような表情を見せてくれるのか、心残りで、機会があれば再度訪れたい日本一の桜の名所である。近年三万本の桜の内、約半分が菌類や虫等、何らかの病気にかかっていたり、樹勢の衰え等で危機に陥っている為「吉野の桜を守る会」を設立したと知った。

桜の国の桜と悠久の風景を、大切に守り後世に残して欲しいと願いつつ、柿の葉寿司と吉野和紙をお土産に帰途に付いた。楽しく心癒される旅だったが、人の多さと駐車場に溢れるバスにはビックリした。この研修旅行で、学び感じた良いところが。さくら友の会に少しでも反映できれば嬉しい。皆さん、おつかれさま。そして吉野のさくらとお天気に、ありがとう！

「よしのにいって」

とより小学校　2年　小山けんた（和泉さんのお孫さん）

ぼくは、この前、さくら友の会の「よしのせんぼんざくらけんしゅうりょこう」に、おじいちゃんと一緒にいきました。いく前に、おじいちゃんが「よしのはテーマパークみたいに、乗物やアトラクションはないけれど、日本でも有名な、桜の名所だからきっときれいな桜が見られると思うよ。小さいときから、きれいなものをいっぱい見ておきなさい。」といわれました。

行きも帰りもフェリーにのりました。フェリーは、とてもとても大きくてホテルのようなレストランや、展望ぶろもあり、驚きました。

初めの日、夕食のとき、こどもは、ぼくひとりしかいなくて、自己紹介のときには、どうしてよいかわからず心配でした。でもおじいちゃんが、一緒に挨拶をしてくれて、おじちゃんやおばちゃんが、みんなやさしく、拍手してくれたので、とてもうれしかったです。みんなの自己紹介は、どれも笑い声や、拍手が多くて、とても楽しそうでした。

「りょうち」というおじちゃんが「ちゃちゃ」をいれて、みんなを笑わせていました。ぼくは「ちゃちゃ」をしりませんでしたが、おじいちゃんが、「ひとのはなしの途中にわざと、からかったり、すこし困らせたりして、面白くすることだよ」と教えてくれました。新しいことばをおぼえました。

会長さんの宮崎民謡

うたも、みんな上手で、とくに、会長さんの、みやざきみんようが、素晴らしかったです。

つぎの日、「よしの」は、雲が一つもなくてよい天気で、夏のように、とても暑かったです。駐車場は、大型のかんこうバスがいっぱいでした。

歩きはじめてからは、桜もまんかいで、下の方では、風がふくと、花びらが、いっぱいふってきてきれいでした。坂道は、右も左もおみやげやさんがいっぱいで、観光客もいっぱい歩いていました。

みんな、「きついきつい」といっていましたが、とても楽しそうでした。ぼくも、いっしょに楽しかったです。

とちゅうのおみせで、おじいちゃんに、竹でつくった「水でっぽう」をかってもらいました。帰ったらこれで遊ぶのが楽しみです。

さくらは、お店のあいだや、お寺のお庭や、向こうの山にも、いっぱいさいていて「え」のようにとてもきれいで美しかったです。いつまでも忘れないと思います。